

山本英治先生のご退任に際して

益 山 樹 生

その若々しい容貌と言動からはとても想像できないことだが、現代文化学部コミュニケーション学科の山本英治先生は本年3月に定年を迎えられ、ひとまず第一線を退かれることになった。本学に赴任してから、実に33年になる。この文をしたためるにあたって先生に経歴などをお尋ねした折、書くのは略歴と業績に留めてほしいと念を押された。ご意向に沿って、先生の略歴と業績を以下にご紹介したい。

〈略 歴〉

1931年、富山県に生まれる。富山大学卒業。東京大学大学院で研究生として学んだ後、富山大学助手、宇都宮大学講師を経て、1966年に本学短期大学部に専任講師として赴任。1968年に同助教授、1973年に同教授。1988年に短期大学部改組に伴い、現代文化学部教授となり、本年に至る。1997年には客員教授として北京外国語大学に赴く。故福武直東京大学教授のもとで、日本農村および地域社会の調査研究に従事。1971年より沖縄県の総合的地域調査研究を開始し、現在も継続中。1976年からはネパールおよびブータンで、1980年からは中国雲南省および江蘇省で、それぞれ数次にわたって地域調査研究を行う。日本社会学会編集委員、アジア社会研究会運営委員、日本ネパール協会理事、人事院専門委員を務める。

〈主要著書（1980年以降のもの）〉

- 蓮見音彦・山本英治・似田貝香門『地域形成の論理』学陽書房、1981。
山本英治編『現代社会と共同社会形成』垣内出版、1982。
松原治郎・山本英治編『人間生活の社会学』垣内出版、1982。
蓮見音彦・山本英治・高橋明善『日本の社会』I, II 東京大学出版会、1987。
高橋明善・蓮見音彦・山本英治編『農村社会の変貌と農民意識：30年間の変動分析』東京大学出版会、1992。
福田一郎・山本英治『コメ食の民族誌』中央公論社、1993。
山本英治・高橋明善・蓮見音彦編『沖縄の都市と農村』東京大学出版会、1995。

〈主要論文、分担執筆（1980年以降のもの）〉

- 「ヒマラヤの人々の生活と文化」東京女子大学紀要『論集』33-1, 1982。
「那覇市の都市的特性と都市問題」東京女子大学紀要『論集』36-2, 1986。
「地域社会と情報」東京女子大学紀要『論集』38-1, 1987。
「公共性と共同性」、『公共性の政治経済学』（宮本憲一編）自治体研究社、1989。
「少数民族社会の共同性と近代化」『東京経済大学学会誌』164, 1990。

「江南の小城鎮」『日中文化研究』2, 1991.

「古代社会の近代化——貧しいが豊かなヒマラヤの王国ブータン」東京女子大学紀要『論集』44-1, 1993.

「地域発展の比較検討——日本と中国」、『国際比較社会学』（古屋野正伍・山手茂編）学陽書房、1995.

「少数民族社会の変動と問題」『東京女子大学比較文化紀要』57, 1996.

上記の経歴や業績からわかるように、先生の専門分野は主として国内の農村地域を対象とする地域社会学である。この分野では、注目すべき業績に対して『福武賞』という賞が贈られる。私自身は専門外なのでその賞の重みはわからないが、その分野の話ではかなり権威のある賞だとのことである。先生が共著で出された『農村社会の変貌と農民意識』（1992）は、実はその賞を得ている。この分野における先生の実績のほどをうかがい知ることができよう。また、先生は特に沖縄に縁が深く、30年にわたって調査行を重ねてこられた。地域社会学の中でもそれほど長期にわたってなされている研究は少ないのではないだろうか。口に出してはおっしゃらないが、先生ご自身もこの点についてはかなりの自負をお持ちのようである。さらに、先生は日本国内だけでなく、東アジアの地域にも積極的に研究の触手を伸ばして現在に至っている。日本の地域社会の本質を知るためにはある程度予想される方向とは言え、誰にでもできることではない。先生の知的好奇心と行動力に改めて驚かされる。

幸い紙面が少し余った。先生の意向とずれるが、ひとつだけ余話を付記させていただく。先生のご専門は上述のように地域社会学、とりわけ農村社会学である。先生は学内業務のことについてはよく愚痴をこぼされていたが、こと研究のことについては愚痴を一切聞いたことがない。楽しんで研究を進めておられた。それは、何よりも山村の人々の朴訥さとそれをはぐくむ大自然に魅せられていたせいだろうと思う。ご自身もしばしば口にしておられたように、先生は根っから山と自然が大好きなのである。先生はその醍醐味をご自分の研究の中で存分に味わいながら、同時にそれを専門外の人達と一緒に味わうのを大変楽しみにしておられた。せっせと機会をつくっては学生や同僚に声をかけ、大自然に抱かれたネパールや中国の雲南の地に大勢で出かけた。それは短期大学部時代から現在に至るまで、とびとびになることはあっても、途絶えることなく続いている。先生に同行してネパールや雲南に出かけ、不覚にも生まれて初めて足元のアジアに目を向けるようになった学生や教職員は数知れない。かく言う私もその一人である。先生は、以前はよく、底に深い溝の入った山歩き兼用の靴を履いて、できるだけ歩いて登校されていた。山行に備えてのことである。最近はその姿をとんと拝見しなくなったが、それは単に愛用の靴がその使命を全うしただけのことであろうと思う。今後もネパール行、雲南行が、そして先生のご研究が途切れることなく続くことを願って、稿を閉じさせていただく。